



マニラ湾の夕陽は昔も今も美しい

今回、フィリピンの山岳民族訪問にあたつて一つびつくりしたことがある。日本からの観光ツアーがほとんどないことである。フィリピン訪問を終え、日本での入国審査

## 20年ぶりのマニラ



で、徳山教会から参加された宮崎玲子さんの入国審査に少し時間がかかった。

係官から「どこに行かれたのですか」と質問されたので「フィリピンに観光に行きました」と答えた。ところが係官は「それは変ですね。今どきフィリピンに観光に行く人などほとんどいませんよ」と不審そうに見たという。

この係官の言葉でわかるように、最近フィリピンに観光で訪れる人、特に女性はほとんどない。出発前、飛行機の便を探す時にも痛感した。日本人が今、海外に行くのは、団体旅行で航空運賃が格安になるのが原因の一つだ。旅行業者に探してもなかったが、ツアーはほとんどない。

やっと「マニラ三日間」というホテル二泊つきのほかは現地ですべてフリー行動というツアーを見つけ、それを延長するという形で旅をした。

今から二十八年前の一九八一年、初めてフィリピンを訪れた際は定期便のほかチャーター便も飛んでおり、日本人観光客がたくさん訪れていた。

しかし、今、考えてみると、それは男性を中心とした買春ツアーがほとんどを占めていたのだ。当時、ほかの外国人の買春もあった。しかし、日本人のように団体で大勢で出掛けることはなく、かつての占領地への大勢の買春ツアーは目立ち、世の批判を浴びた。そして買春ツアーが中止されると、観光に訪れる人もなくなつて今の状況になつたのだ。

何とも失礼な話で、これでは日本人は買春のためにだけフィリピンに行つていたことになる。とにかく、約二十年ぶりのフィリピンは貧富の格差がひどく、国民の大多数が貧しい生活を強いられていた状況は改善され、貧しい人々が少なくなつていくことを期待して訪問した。

しかし、私の日には二十年前のフィリピンとほとんど変化がないように見えた。これまでの五回の訪問では一度もホテルに泊まったことはなく、教会や学校関係の施設とホームステイだった。今回、団体扱いの安い航空チケットがホテルつきになつていたので、マニラで三泊、バギオで二泊した。



路上に眠る人たちには胸が痛む

マニラのホテルで泊まる際、五百ペソ（千円）の保証金を払わされた。チェックアウトの際に部屋を確認してお金は返金されたが、海外旅行では初めてのことである。

ホテルのすぐ近くにセブン・イレブンがあつて利用したが、ホテルやコンビニエンスストアの入り口には必ず銃を持ったガードマンがいた。

ホテルから出るというんな物売りから声を掛けられる。路上生活者やもの乞いもいて、それほど治安が悪いとは思われないが、貧しい人の生活はこの二十年間に変わった印象はなかったのだ。（元山口放送取締役ラジオ局長）